# 人間学的精神医学とスピリチュアリティ
## ―井原裕氏との対談録　前半

**（神庭）**

メールでの対談をお引き受けくださり感謝します。

先生は、精神科医療の現場が、心理療法を軽視し、薬物療法を偏重する傾向にあることに、鋭い批判を展開されておられます。精神薬理学を専門としている私にとっては少々耳の痛いご指摘です（笑）。しかし、精神科臨床の薬理療法の現状を考えると、先生のご指摘には教えられること、賛同できることも多々あります。

さて、先生が自治医科大学におられた宮本忠雄先生から精神病理を学ばれたことは知っていました。あるとき僕の大学の同級生で内科医として活躍した知人が主催する「信仰と医療」に関するウェブ勉強会で、先生が「患者中心の医療」について講演をなさることを知り、こっそりと視聴させていただいたのです。その講演のなかで、『精神科医　島崎敏樹―人間の学の誕生』に触れておられた。その「人間学的精神医学」が宮本先生の師匠にあたる島崎敏樹先生に遡ることを知りました。僕が近年、精神科臨床におけるスピリチュアル・ケアに関心を持っているため、先生にメールを差し上げ、「先生はスピリチュアリティ」をどうとらえているのか、とお聞きしたところ、先生からいただいた返事には、「『ひとりの人間として、過酷な人生を、それでも生きる』ことが、スピリチュアル・ライフであろうと思っております。それは、私ども精神科医にとっては、『ひとりの精神科医として、過酷な臨床を、それでも続けていく』ことであり、私ども精神科医は、患者さんに対して、『ひとりの人間として、過酷な人生を、それでも生きる』よう促していくことが、精神療法である。…私ども精神科医にとって、spiritual growth への道は、ほかならぬ日々の診療だと思います。精神科医の仕事を、神に仕えるような静謐な心境で淡々と続けることだと思います」とありました。

とても惹かれる言葉でしたし、いつまでも気になる言葉でもありました。そこで「人間学的精神医学」についてさらにお教えいただきたいと思い、この企画を思いつきました。まず、このご著書を書こうと思い立った動機、そして島崎精神医学とはどういうものであったか、そして今日に至る流れなどからお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

**（井原）**

『精神科医　島崎敏樹－人間の学の誕生』を書いたのは、英国留学の挫折感ゆえです。不全感ばかりが残りました。精神医学認識論について研究するつもりで留学したのに、途中から PhD コースに進む話がでました。円高のおかげで日本の貯金が価値をもって、授業料も払えてしまいました。でも、ほどなく認識論的な思考を展開するには、自分の英語力が上がらないことを痛感しました。それで実行機能に関する研究を追加して、歴史的・認識論的研究半分、データ研究半分の学位論文を突貫工事で作りました。ただ、「中途半端だった」という挫折感は大きかった。それ以上に、自分が本当は何をしたかったのか、何のために精神科医になったのか、わからなくなりました。イギリスから帰国して、よき縁をえて花巻病院へ、そして、順天堂へ。そういう紆余曲折のなかで、夏目漱石の「私の個人主義」（岩波文庫『漱石文明論集』）を何度も読みました。漱石の英文学研究の挫折とそこから作家として再出発する際の文章です。私も漱石と同じで「他人本位」だったと思います。かといって、漱石ほどには「自己本位」になれません。せめて自分の原点を見つめよう。そう思って、高校生の頃に読んだ島崎敏樹の本を再読しました。クリスチャンの神庭先生には「回心」に譬えるとわかりやすいかもしれません。長くて苦しい夜の連続のなかで、「自分に帰れ。それ以外に生きる道はない」と悟りま

した。人生を棒にふるつもりで、初心に帰ることにしました。

島崎敏樹は、東京医科歯科大学の初代教授。その一番弟子が宮本忠雄自治医大名誉教授で、私は宮本先生の直弟子ですから、系統としては島崎の孫弟子ということになります。島崎先生の直系の弟子としては、そのほかに宮坂松衛、小田晋、大森健一。宮本先生の直弟子として加藤敏、阿部隆明、阿部裕、阪上正巳、大塚公一郎といった面々です。これが関東のいわゆる「人間学派」を構成するメンバーと言っていいでしょう。宮坂先生は脳波の先生ですから、少し違いますが。

ただ、この人間学派の先生も、島崎敏樹の著作の思想的な面まで引き継いでいるわけではありません。島崎先生の著作は、『感情の世界』『心で見る世界』『生きるとは何か』などです。特に、『感情の世界』は、内在的神秘主義ないし汎神論を語っていて、宗教的な著作です。文章の柔らかさに反比例して、内容は高度です。私も十分理解しているとはいえません。

**（神庭）**

英国留学が先生の挫折体験、ヤスパースの言う「限界状況」だったのですね。

ケンブリッジ大学からPhDを与えられたのですから、得がたい成功体験をされたものとばかり思っていました。しかし、僭越ながら、英国での挫折があったから、今の先生の精神病理学や精神療法が生まれたと言えるのでしょうね。「生きがい」とか「生きる意味」とかは、それを失ったとき、あるいは失いそうになったときに初めて「探し求める」ものです。平々凡々と生活しているときには、考えもしないものです。精神科を訪れる患者さんも大きな挫折を経験しています。そこから新たな「生きがい」を探す旅が始まります。その支援をすることはまぎれもなく精神科医の仕事です。

「他人本位」では「生きる意味」を見つけることはできないと思います。上田紀行氏が『生きる意味』に書いているように、「私は私自身の『生きる意味』を想像し、私の生きる世界に意味を与える存在なのであり、世界の中心は私たち自身にある。（中略）そして私達の周りには私だけでなくたくさんの中心があることが分かってくる。（中略）私のかけがえのなさに気づくことは、あなたのかけがえのなさに気づくことでもある」と言えましょう。私達はとかく「他人本位」になりがちです。つまり、他者が持っているものを欲しがり、他者が得ようとしているものを得ようと思ってしまう。それはすなわち、「自分」が何を求めているのか、何をしたいと思っているのかを見失っている姿です。

さて島崎先生に話を戻しますと、先生のご著書に誘われて、『生きるとは何か』と『心で見る世界』を読んでみました。どちらも、読後にしんみりとした、そして癒やされた気持ちになりました。

敏樹先生は島崎藤村の姪の息子であり、西丸四方を兄にもつという家系の精神科医という印象が強いせいで、重なってしまうのですが、どこを読んでみても詩人や作家のような美しい日本語で溢れています。また余談ですが、九大の後輩が藤村の『夜明け前』を読了したと聞いて、僕も毎晩少しずつ読み進めていることも影響しているかも知れません。今住んでいる伊那谷の飯田と『夜明け前』の舞台となった馬籠宿とは車で40分程度しか離れていませんので、何度か訪れたことがあります。それはさておき、僕がキャリアの初期に読んでいたら、あちこちに傍線を引いて、書き込みを入れながら読んでいただろうと思います。島崎先生は、人のこころを深く読み解く感性と該博な知識とそれを表現する文才とを備えた教養人であり、神谷美恵子が私淑し、島崎先生と出会ったことで精神医学の道を選ぶことを決めたというだけのことはある人物だなと思います。

ではそろそろ本題に戻り、島崎先生から宮本忠雄先生へと流れる「人間学的精神医学」のことをお聞きしたいと思います。島崎氏の精神医学をあえて“人間学的”と形容するとき、その精神医学の核となる要素はどのようなものなのでしょう。それは、宮本氏のなかでどのような形へと造形されていったのでしょうか。

**（井原）**

実のところ、島崎先生ご自身は、自分の学問を「人間学」という言葉でくくられることに、最後まで抵抗していました。実際、『感情の世界』にも『生きるとは何か』にも、「人間学」という語は出てきません。そのあたりの事情を臺弘先生＊はこう語っています。

「もっとも人間学的といわれると、妙にしり込みした。自分に課した枠組みがもっと豊かなことを言いたかったのだろう。彼の学風をしたって、彼の許には各地の大学から俊秀が集まってきたのに、彼自身は50代半ばにして今度は精神医学から抜け出して、さらに広い世界に身をおこうとした（臺，1977）」

日本の精神医学において、「人間学」とは「現存在分析」とほぼ同義でした。この潮流は、1950年代後半にドイツから日本にやってきました。慶應義塾大学の新海安彦、京都大学の木村敏、東京医科歯科大学の宮本忠雄といった諸先生方が『精神分裂病』Ⅰ・Ⅱ（みすず書房）を出したのが、1960-61年です。これを受けて、1960年の精神病理懇話会では、荻野恒一、小木貞孝、宮本忠雄といった当時30代の若手が「妄想の人間学」と題するシンポジウムを行っています。そのときに、島崎先生は、「人間学」という用語を使う若手に対して、鷹揚な姿勢を示しつつも、留保をつけています。

「つまりこれはきわめて zeitgebunden な思想じゃないかと思われます。これはすぐれてヨーロッパ的な思想ですが、ヨーロッパ的な思想は人間の世界史的な生存状況の変遷によって変容していくので、こういうことを我々は念頭において、根底において理解すべきじゃないかと思います。」（島崎，1961）

島崎先生が何でこんなに慎重なのかといえば、「人間学」も「実存主義」も「現存在分析」も、それどころか西洋哲学それ自体すら、所詮は舶来の思想にすぎないからです。「現存在」だの「実存」だの「超越者」だのと難しいことを言っても、それを日本の現状、日本の精神科臨床に根差した思想にしなければ、何の意味もありません。

ちょっと、背景を説明させてください。実存主義的人間学は20世紀の西洋を支配したように思われがちですが、ここには誤解があります。キリスト教の影響が揺らがなかった地中海諸国や南北アメリカには、実存主義はありませんでした。イギリスもそうです。実存主義は、ドイツ語圏とその周辺特有の現象です。19世紀後半のドイツといえば、学術的にも、思想的にも世界のトップでした。だからこそ、明治政府だって「蘭学の次は、獨逸学だ」ということで、獨逸学協会を作って彼の国の法律と医学とを移入しようとしたのです。この科学と技術の台頭により、ドイツ語文化圏においてはキリスト教会の影響力の喪失という出来事が生じていました。キルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ヤスパースと続く実存主義の大山脈は、このような時代背景において理解しなければなりません。

クリスチャンの神庭先生にこう申し上げることは、「釈迦に説法」「イエスに聖書」かもしれませんが、日本の精神医学が人間学・実存主義を導入するときに、この思想を「対照群」としてのキリスト教との比較において、読まなければならなかったのです。これらの哲学には、「ポストキリスト教の哲学」「神学批判としての哲学」「キリスト教のもたらしたトラウマから脱却するための宗教二世の哲学」という側面があります。キリスト教には、排他的で、教条主義的で、独善的なところがあります。さらには原罪説や終末論など、素朴な信者の恐怖心を煽るようなところがあります。実存主義は、ニーチェの「奴隷道徳」批判が有名ですが、こういうキリスト教の闇の部分をこそ鋭く批判したのです。

しかし、サルトルを除いて、実存の哲学者たちは、キリスト教を捨てていません。キリスト教のもっとも良質な部分、倫理的で、スピリチュアルなものは、そのまま受け継いで、むしろ、いっそう純化させていこうとしたのです。したがって、人間学を精神医学に導入する際には、その良質な

＊臺弘：島崎敏樹君の思い出．島崎敏樹先生追悼文集刊行編集委員会編集『心で見る生涯―島崎敏樹先生追悼文集』，p. 40-42，東京医科歯科大学神経精神医学教室，東京，1977.

部分、スピリチュアルな部分にこそ可能性を見ていかなければなりません。

**（神庭）**

レフ・トルストイは、「キリストの復活や最後の審判などは信じない、キリストの教えのなかに神の意志が現れている」と言ったといいます。ロシア正教会は彼を破門しようとしたほどです。しかしこの思想は世界各地で共鳴者を生み出した（島薗進『宗教を物語でほどく』）。“教会のキリスト教”を信じることができなくなり、およそ10年間作品を生み出せずにいた。やがて、人のこころの弱さ、空白を描いた短編『イワン・イリイチの死』を書き上げました。スピリチュアルな苦しみと救いの一つの形が描かれています。「死は終わった」「もはや死はない」と自分に向かって言う最後は感動的です。

島崎先生は『生きるとは何か』で「失うことで幸福はそれと分かる。したがって、『生きていること』というもっとも根底のことがらとなると、平生は気づこうにも気づけるわけがない（p. 58）」という。生きがいもそうですね。「親孝行、したいときには親はなし」もしかり。失って初めてわかる大切なものがあります。島崎先生は、人の複雑に入り組んだ心境を巧みな筆致で描き出し、「人生とは何か」について教えてくれています。

さて、先生からは冒頭、島崎先生の一番弟子の宮本忠雄先生を師として精神医学を学ばれたとお聞きしました。先生のほかにも大勢の精神科医が宮本先生に師事されています。宮本先生の精神医学はどのようなものであったか、そして宮本先生はどのようなお人柄だったのでしょうか。島崎先生との関係も含めて教えていただけませんか。

後半につづく